



学校教育目標

三根中学校に誇りをもつ生徒を育てる ～自主・自律・寛容の態度形成を通して～

## 受験シーズン突入

1月に入り、いよいよ本格的な受験シーズンに入りました。先日行われた佐賀私立前期試験では、多くの3年生が受験する初めての本番の入試となりました。今後も私立後期や県立入試が続きます。何事も「備えあれば患いなし」の言葉のように準備を怠らず、落ち着いて入試を受けられるようにしておいてほしいと思います。

また、現在インフルエンザB型が流行しているようです。入試当日の体調管理は日頃の体調管理と予防が肝要です。勉強時間の確保も大切ですが、体調を整えるためにもきちんと睡眠時間を確保し、万全の状態を受験できるように心がけてもらいたいと思います。

## 面接の練習での気付き

入試シーズンに入ると、必然的に入試で行われる面接の練習を実施します。この面接の練習は、入試だけでなく社会人としてのマナーに繋がる大切なものです。

- ・ノックの仕方
- ・ドアの開け方
- ・挨拶（礼の角度・両手の位置・視線・声）
- ・言葉遣い

こういったものは、一朝一夕には身につかないものです。特に所作や作法は練習すればできるようになりますが、最後の言葉遣いは普段からの心掛けが大切です。想定していない質問をされたときに一生懸命に答えようとして、丁寧な言葉遣いを忘れてしまった…ということも珍しくありません。大人としてのマナーを含めて自分自身の言葉遣いを見直してもらいたいと思います。

## 言葉はなんのための…

言葉は攻撃のための道具なのか？ ということについて、最近ある人の記事を読みました。

（山口拓朗氏 『12歳までに身につけたい「ことば」にする力 こども言語化大全』より）

愚痴、悪口、否定、不満、ののしり。

こうした言葉が日常的に飛び交う家庭で育った子どもの言語化力は、どうなるのでしょうか。結論から言えば、しなやかで豊かな言語化力は育ちにくく、自分や他者を傷つける言葉に偏りやすくなります。子どもは、言葉を「意味」だけで覚えているわけではありません。言葉に伴う感情や使われ方、さらには親の表情や声の強さ、その場の空気まで含めて吸収しています。「この言葉は、どんな気持ちのときに使われるのか」。そうした文脈を含めて、言葉を学んでいるのです。そのため、親の愚痴や不満、悪口が多い環境では、子どもは次第に、言葉を「怒りや不満をぶつけるためのもの」「感情をただ吐き出すためのもの」と認識するようになります。その結果、「言葉は攻撃の道具」「強い言葉を使ったほうが勝つ」という学習が進んでいきます。

【言葉の背後にある世界観まで子どもは引き継ぐ】

さらに厄介なのは、言葉の背後にある世界観まで引き継いでしまうことです。世界は、不満や不安、敵意に満ちている。そんな見え方が、無意識の前提となる。すると、子ども自身も、友だちをののしったり、きつい言い方で相手を制したり、少し嫌なことがあるだけで暴言を吐いたりしやすくなるのです。本来、言語化力には、怒りや悔しさだけでなく、優しさ、励まし、希望、感謝といった言葉も含まれています。同じ出来事でも、「攻撃された。絶対に許せない」と捉えることもできれば、「この経験のおかげで大事なことに気づけた」と意味づけし直すこともできます。子どもは、その両者を振り子のように行き来しながら、健全な言語化力を育てていくのです。もちろん、ネガティブな感情や言葉は、人間にとって必要なものです。しかし、それしか使えなくなると、言葉や感情のバランスが崩れてしまいます。否定やののしりが多い環境で育った子どもは、ネガティブ感情が生まれた瞬間に、〈自分を傷つける言葉を吐く〉か、〈言葉で他者を傷つける〉かという短絡的な二択に陥りやすく、「考えて言葉を選ぶプロセス」が育ちません。家庭で飛び交う言葉は、良くも悪くも、子どもの未来の土台になっていくのです。

私も自分自身の言葉、そして感情について改めて考えさせられる内容でした。ご参考までに…